
魔力と知識の使い方。

空いおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力と知識の使い方。

【Zコード】

Z3619X

【作者名】

空いおん

【あらすじ】

得体の知れないパソコンの電源を入れたら美少女に会っちゃいました。それでここは何処・・・。

異世界トリップものファンタジーです。あまり主人公が強すぎるのは感じないと思います。たぶん・・・・きつと・・・・恐いくらい

・・・・。

更新速度としては、最低でも1週間に1話づつくらいを予定しています。のんびりやっていく予定です。

第4話、第5話の前半がかなり飛んでいました。修正しましたが、多少違和感が残るかもしれません。申し訳ないです；

第一話（前書き）

はじめまして。空いおんです。

文章が「ゴタゴタしないように」気をつかっていこうと思つていていますが、思つてはいるだけなのかも知れません。読み辛ければ書いてください。
がんばつて改善します。

第1話

「うーはビーナス…。」

俺は、下手をするとキングサイズよりもでかいんじゃないだろうかというベッドに横たわっていた。このベッド、凄くやわらかいんです。どのくらいやわらかいのかと言いますとですね、体が沈み込んでじゅうくらい。うん、俺みたいな一般人では絶対に寝ることなんて出来ないようなベッドですよ。あとですね、天蓋つてものを生まされて初めて生で見ました。

さてさて、俺はどうしてこんなところで寝ているのでしょうか…。

俺は大学の講義を終えて、今日はさつやと帰つて買い物にでも出かけようかと思っていたときでした。俺の高校からの友人がなにやら怪しげなサークルに入つておりまして、確か名前は…『オカルト科学研究会』。略してオカカケン。若干言い辛いのがミソなんだそうです。それでですね、そのオカカケンの友人、岡 賢君が「面白いものが手に入つたから、見に来てよ」というものですから、ついていつてしまつたのです。

そうそう、これが悪夢の始まりだったわけですよ。いや、悪夢なのかは分からんのですがね。

オカカケンの団 賢についていくとオカカケンの部室には古めのパソコンが1台置いてありました。ちなみにこのオカカケン、部員はオカケン、俺、1年上の先輩が2人の4人構成なんですが、俺は幽霊部員なんでまともに顔を出していないんです。元々、そんなに興味なかつたし、なんとなくサボれそつなのと付き合いで入つただけですから。

部室に入ると、胡散臭い本やら壁に這わせたLANケーブルやら、得体の知れないアイテムなどカオスと呼ぶに相応しい部屋でございました。LANケーブルをたどつていくと、件のPCでしょうか。年季の入つたPCにつながっていました。

「ねえ、健君。このPCの電源入れてみてよ。」

健つて言つるのは俺の名前です。フルネームで武田 健つたけだ たけるて言います。若干言い辛いのがミソです。ここで自己紹介させてください。名前はもう言いましたね、家族構成は両親と妹が1人。ちなみに妹はモデルをやつています。雑誌とかで見かけたら俺に声を掛けてくださいね。3冊ずつ買いますんで。シスコンなんですよ、ええ。かわいいやつなんです。・・・両親は専業主婦の母とエリートなサラのリーマンな父。そこそこ稼ぎはあるみたいですね。あとですね、自慢じゃないんですけど、自慢じゃないんですけどね?うちの家族みんな美形なんです。なんてすばらしい。

俺はおじいちゃん似なんですけどね。

「・・・・・。」

「あれ?どうしたんだい? 健君。」

おつと、少しばかりブルーが入っておりましたよ。大丈夫です。いつものことですよ。

「ああ、いや。なんでもないよ。PCの電源をつければいいんだよね？」

「うん。このPCも、何でも異界から飛来した鉱石を半導体に使用して作ったものらしいんだ。何だかロマンを感じないかい？」

いやまったく。とは言えないんですよ。オカケンは変な趣味を持つてますが、見た目がすば抜けで優秀なんでござります。茶系の女の子みたいなボブヘヤー、小動物みたいなかわいい顔。高校生の学園祭で女子を押しのけてミスコンで優勝した実績を持つてるんです。本人は気にしているみたいですが。このキラキラした目をみちゃうとYESとしか言えないんでござりますよ。

「NOと言えない日本人か……。」

その代表みたいなものでしょうか、俺は。

「このPCも、何でも異界につながっているって言う噂があるんだよ。それでPCに電源を入れるときに審査されていて、その審査を通った者だけが異世界の英雄になれるとかなれないとか。」

何ですか、この胡散臭さ。話を聞く限りPCの電源をつけるだけで良いみたいなんだとつけて帰りましょうかね。

そう思つて気軽にポンつと電源を入れたなんでした。

そこまでは覚えておりました。

さて、今の状況がさっぱり分かりません。

キングサイズらしきベッドの上でねつじうがって居ると、こので
かでかとした、いや、煌びやかな一室が目に入ったんですが、いや
はや王侯貴族様のお部屋様でござりますか。そういういたくなるくら
いキラんキラんしてゐるんでござりますよ。俺はこの部屋では絶対に
暮らせないです、落ち着かないつたらありやしません。

「天井が眩しい。」

ぼそりと呟く。天井には幾つかのシャンデリアらしきものが、周
りには絵画。飾りつけなんてここまでいるのだろうか。

コンコン

おや、誰かいらっしゃったようですね。でも俺はこの部屋の主で
はないんです。ちょいと隠れておきましょうか、食べられても怖い
んで。あ、クローゼットお邪魔しますね。

「失礼いたします。お加減は・・・え？」

クローゼットの隙間から様子を見るとそこには、なんと美人メイ

ドさんが！美人が重要なんです。御髪の色はロゼですね、俺よりも
1つか2つくらい年上でしょうか、あとクローゼットの中いい匂い
がしますよ。何だか甘い香り・・・。

「だ、誰か！」

部屋の中がもぬけの殻だと分かると、メイドさんは人呼びにいつたんでしょうかね。部屋を出て行きました。では、今のうちに抜け出しましょう。

「...」
「...」

扉を開けて豪華なクローゼットから抜け出す。すると、一枚の布が目にはいりました。衣装棚の引き出しからはみ出たそれを引き出してみると、それはなんとも、まあかわいらしくピンクの下着。所謂、おパンティー様でございました。フリルがところどころにあしらわれており、けれども派手すぎず高貴なものを感じさせます。

・・・・・スバラシイ。

「何が素晴らしいんですの？」

ツ ! ? ?

驚いて振り向くと、そこには赤髪の気の強そうな美少女が仁王立ちしておりました。

髪は腰ほどまで伸びし、頭には若干癖毛が目立つ。瞳は宝石をはじめ込んだかのような真紅に燃え、気品溢れる顔立ち。年の頃は10代半ばといったところでしょう。服装は軍服とブレザーを足して

割つたような服、左胸には校章のようなものが伺える。そして、後ろには先ほどの美人メイドさんが。

「屋敷の前で倒れていたので、医術師に診て貰おうと思つていたのですが・・・その様子では大丈夫そうですね。」

「めかみにくつきりと青筋が立つていらっしゃるので、これは相当お怒りになられている」と様子。先ほどから俺の汗が止まりません。

「あ、あのですね・・・その・・・可愛らしく下着ですね。」

「お死になさい。」

天使のような微笑のあとに俺の顔面前に指をさすと、ヒュツヒュツと瞬空気が吸い寄せられるような音が鳴り、眼前が光に包まれたかと思うと大きな爆発音がして俺の意識は途切れた。

第2話

田を覚ますと先ほどのベッドにまた沈んでいた。

「お田覚めですか」と？

横を見ると、ベッドのそばに置かれた椅子に先ほどの少女が腰掛けっていた。そして、横には美人メイドさんが！

「気絶魔法程度でダウンするなんて……貴方、本当に貴族ですか？」

「……氣絶魔法？」

今、魔法とおっしゃいました？今時、魔法少女の妄想に浸る子なんていふのでしょうか。そういうえば最近は気候の変化が激しいですから、少しばかり頭がどうにかなつても不思議ではないんですけど。

「氣絶魔法もご存知ないなんて、何処の田舎の箱入りですの？魔法ぐらいご存知ですね。」

俺はどうやら、この少女を呆れさせてしまったようだ。「さあ、しかし、魔法なんていわれても……。

「……いや、知らない……かな。お兄さんに教えてくれる？」

きつと1人で遊んでいるうちに、そう考へ込んでしまつたんでしょう。可愛そこなにやら状況は分かりませんが、助けてくださいみたいなのでこのくらいは付き合いましょう。

そういうと、少女はプルプル震えだした。とても嬉しいのだろう。

「あ、貴方は……」

「うん。」

さあ、おいでと腕を広げてみる。女の子が泣きたいときには胸を貸すのが男……いや、紳士といつものでしょ？！

「わたくし 私を馬鹿にしてるんですの――――――――――――――？」

その瞬間、一瞬で少女の手のひらに出来たサッカーボール大の光の球が俺の顔のすぐ横を小爆発を起こしながら背後の窓際の壁に向かっていき、壁を3分の1ほど吹き飛ばした。

「お、お嬢様落ち着いてください！またパルティン様に怒られますからあー！」

美人メイドさんは半泣きで少女を宥めようとしている。その甲斐があつたのか、少女は少しばかり頭が冷めたようでした。

「はあ、はあ・・・・すう、はああ」

「ま、魔法！？今のが まさか、そんな！」

「？・・・あなた魔法を・・・・・本当に知りないんですね？」

「ククククと二回ほど頷くと、少女はひとつため息を吐いた。
「うやうやしき一つの言ひてこた異世界とやらに本当に来てしましたよ
うです。小さなことならさつわと帰つて居ればよかったです。

「あなた

「

「何事ですか……」

パンチと強く扉を開く音と同時に、軽鎧を身に纏つた男たちが部屋にいらっしゃいました。数は10人程でしょうか。もう、いやな予感しかいたしません。

「貴様！何者だ！お嬢様から離れる……」

軽鎧の方々は部屋の壁が粉々になつてゐるのを見ると、顔を青くして俺に離れるよつおつしゃつておりますが、粉々にしたのは俺じやいぢやいません。そのお嬢様です。

「パルティン様の結界魔法を破るなんて……かなりの使い手だ！
お前ら、油断するなよ！」

リーダー格の方でしょつか。その方の命運と共に周りの方々が俺を取り囲もうと動きます。これは非常にまずい、つかまるどころかここで殺されてしまいそつです。異世界に来てしまつたことや今の状況のことを考えると本氣で泣きそうですね……。

(・・・死んじまうなんじめんだ。)

「ツ！？詠唱呪文！？」

近くに寄ってきた1人が何故か驚かれて、その瞬間他の方々に緊張が走った様子。今なら砕けた壁から逃げられる！

「 クソッ！」

一瞬で脚に入れ、全速力で外に向かつて走る！後ろから6人ほど追いかけてきている。砕けた壁を抜ける際に崩れかけの壁を蹴り飛ばす！すると3人ほどその崩落に遮られ足が止まつた。外に出るとそこはベランダ・・・ベランダ？

「 嘘ー！？」「2階！？」

外の景色に脚が止まりそうになつたが、後ろから残りの兵士が俺を襲おうと腰にさした剣に手をやる。本当に絶体絶命ですよ！これは！

「逃がさん！」「で

「くおおおっ！…」

俺はベランダの手すりに手をかけると、それを飛び越えた。2階なら飛び降りても死にはしないだろう。落下しながらそんなことを考える、でも本当に魔法が使えたのなら・・・飛んで逃げられたのにな。

フワッ

「え

一瞬、身体が浮いたような感覚を覚えると、俺は地面に尻餅をついた。

「身体が……浮いた？」

ふと、落ちてきた場所を見るとそこにはさつきの少女が居た。彼女が助けてくれたのだろうか。

「待て……逃がすな……！」

兵士が捕縛用らしき綱を使って2階から降りようとしている。急いで逃げないとまずそりです。とりあえず屋敷の敷地から出なければ！

俺は、敷地を走って上れそうな壁を越え、外に出た。

。

異藍の少女

わたくし
私が学園に登校しようとしていたときのお話ですわ。

朝は日が昇る少し前、御付のメイドであるエリルに起こして貰い、魔法学を中心に予習と復習。その間にエリルにお風呂を沸かして貰い、予習・復習が終わり次第入浴。そして、入浴後に朝食をとり、着替え等の準備を終わらせて登校。

これがいつもの予定ですが、その日は少し予定が狂いましたの。

「あら~。」

ふと登校しようと敷地の門を出ると、そこには黒髪の青年が倒れていました。

髪の色といつものは、その個人の属性をあらわしますの。私などは赤ですから、単純に考えれば火の属性になりますわね。単純に・・・といいますのは、その属性の中にさらに系統がござりますの。たとえば、火属性の中には 火炎系・加熱系・爆発系など

他にも発見されていないものがあるかもしぬませんが、全体の8、9割はこのうちの3つに絞られるでしょう。

私は3つ目の爆発系になりますの。これは他の2つに比べて攻撃に特化していて、数も少ないので戦いの戦力として重宝されますわ。

しかしながら、この方の髪の色は妙ですわね。単純に考えれば、髪の色が濃ければ濃いほど魔力が高いのですが・・・黒色なんて見たことも聞いたこともありませんわね。

「服装から見て貴族かしら。変わった生地を使つてるようですねけれ

「…………」

つるつるした光沢のある生地ですが、縄を使つてもこんな光沢は出ませんわ。

「ウィルナー。この方を私の部屋へ寝かせておきなさい。」

「は、いや……しかし。」

「かまいませんわ。私が見つけたのですから、お父様には黙つておきなさい。あの人の玩具なんかにはさせるつもりありませんの。」

アガット家の専属騎士隊長であるウィルナーは渋い顔をしながらも、私の命令を聞き入れましたわ。仕方がありませんわ、彼はアガット家に仕えている身。私よりも当主であるパルティン・アガット・・・私の父の命を優先しなければなりませんから。

「私はこれから『当主様と城の方へ向かい』ます。この方については誰にも言わないようにいたしますのでくれぐれもご注意ください。いざという時は、副隊長がおりますのでそいつに言つてやってください。」

そういうと、ウィルナーは黒髪の青年を担いで屋敷へ運び込みました。ウィルナーが屋敷に入つて行くのを見やりながら私は学園へ向かいましたわ。

「黒髪の子がいない？」

私が学園から帰つてくると、黒髪の子の様子を見に行かせたエリルがあわてて戻つてくるなりそつ言ひます。まったく、あまり手を焼かせないで欲しいのですわ。

「礼も言わざるとは、とんだ礼儀知らずですわね。いいでしょ？」

学園の手提げ鞄を他のメイドに手渡し、部屋へ向かう。

「」、「」の、破月のリリーナ・アガットがたつぱり教えて差し上げます
わー！」

第3話

中世期のヨーロッパのような街並みを走り続けること10分ほど、何とか撒けたようです。

「……あれ？」

ここで不思議に思ったのですが、俺は10分の間全力疾走していたんです。にも関わらず、まったくといつていいほど疲れていないのです。

「んなアホな……。」

しかし、街並みを見てみると「こ」が日本ではないことを思い知られました。やはり異世界とやらに来てしまったようです。

それと、走って来る際に町の人を見たのですが、皆々の髪の色や目の色がおかしいのです。金髪碧眼とかそういうものですからないです。ある人は緑色の髪と瞳、ある人は青みがかった髪と瞳。そして黒髪黒目という人は1人も見当たりませんでした。

「もしかして、これ田立ってるんじゃ……。」

「のまだと、時間の問題でしょう。とにかく出来るだけ離れないと。」

この街は、少し小高い山の上に出来ているようで、頂上に城がありました。ここは城よりも少し低い位置ですから、城下町のようなものでしょうか。何気に建物や、恐らく武具店などの商店も高級な感じです。あと値札が〇で一杯なんですが……。

「あれ？」

取り合えず、下つていけば良いかと歩いていると高い壁に遮られていたので、迂回するよう歩いていたのですが、いつまでたつても壁が抜けられないのです。

「困った・・・」

しかし、まあ歩いていくとしか出来ないのですが。

「ん？あれば・・・」

そしてまた、しづらへ歩いて行くと門でしょうか。恐らくここから外にいけるのでしょうか。ですが、門番らしき人が2人、左右に配置されています。

「参ったな、こりゃあ出られないかも・・・。おつ。」

少しばかり様子を伺つてみると、門が開き、外から一台の馬車が入つてきました。どうやら何かを運搬してくるのでしょうか。白い布で覆われているので中は見えません。

「あの馬車に潜り込んでいればそのうち出られるかもしれない。」

何もしないよりは、まず行動。と、馬車を尾行します。

「黒髪は田立つなあ・・・なんか隠すものないかなあ帽子とか。」

パークーとか着ていればよかつたんだけど、今來てこるものばかり

レスシャツ的なのものと黒のベスト的なものとネクタイ的なものと黒の綿パン的なもの・・・少しフォーマルっぽく仕上がつてあります。」
「ういう格好が好きなんですよ。俺。

「うちはの世界にはなさそな服装だよなあ。」

目立つ要素が満載ですね。

しばらく馬車をつけていると、大きな看板のついた店についた。
看板には奴隸商と書かれている。

店の前に馬車が止まり、御者が白い布をめぐると大きな檻が姿を現す。中には幼さが残る少年や少女、または美女が居たり、大体20人ほどだろうか。全員が檻襷を着て、手枷をさせられている。

「むう・・・なんか日本に居ると絶対に見られない光景だよなあ・・・かわいそうに見えて来るんだが。」

だからといって、助けることが出来るわけではないんですけどね。

檻の中には全員を連れて御者は店の中に入つていぐ、今のうちに入つてしまいましょう。

白い布をめぐり、檻の中に入る。幸い鍵は開け放しになつていた。

第4話

荷馬車に揺られる」と、しばらく。そろそろ尻が痛くなってきた
が中々馬車が止まらない、そろそろ走っている中道に飛び降りよう
かと考えていたとき、馬車が止まり、外から話し声が聞こえてきた。

「

「

2、3言会話が聞こえて馬車が再び動き出す。布の隙間から外を
見ると、先ほどの高級感のある街並みからは打って変わって質素な
街並みに変わる。

（さっきの門を潜るだけでこんなに違うのか・・・）

人の群れも先ほどより多く、武装している人も多い。それも、兵士と言つような鎧や槍ではなく剣やボウガンを持ち、皮の鎧を着込んでいる。

（盗賊つて、訳じやあないよな？）

また暫く馬車に揺られると、馬車は路地のよつたに入り停
止した。

（看板が見える・・・奴隸、市場？）

名前からして、恐らくここから奴隸を仕入れるのだらう。奴隸も立派な商売として成り立つてゐるのだ。國からしてみれば難民に金を使って救済するより奴隸にして商品としたほうが儲かるのだらう。

(胸糞悪いけど、御者が出払つてゐる今の「ひたすら出て行け。」)

俺は鍵のかかっていない扉から出ると、路地を抜け群衆に紛れるのだった。

周りを見渡すと、殆ど的人が茶毛や栗毛の色をした髪の毛と瞳をしていて、武装している人の中には稀に緑や青などの色を見ることが出来る。だがそのどれもが色がくすんでいて、あの爆裂少女ほど鮮やかさは無かった。

ある程度歩いていくと、露店が並んでいる大通りに出た。他の通りよりも活気付いているのが分かる。

(そうだ・・・ある程度お金を持つてないとまずいかも。)

今、俺が持つてゐるものは財布と携帯くらいのものだ。携帯は案の定つながらないし、財布も逃げてゐる途中どこかで落としてしまつたらしい。

そんなことを考えながら歩いていくと、ひとつの露店が田舎へいる。

「さあーうちの商品を是非見ていてくれ！大陸の端の国の珍品か

ら、貴族様御用達の高級品まで何でも揃つてゐよー。おつと、もう少
ん普段着だつてあるから心配すんなよー。」

露店の店主は40代くらいの髭面の筋肉隆々なおつさんだつた。
髪や髭、瞳はブラウンで顔は温かな雰囲氣がある。

(わつこやあこの服売れつかな?)

恐らくこの世界では珍しい化学纖維を使つてゐる。辺りの人を見回
しても、簡素なシャツやズボンを着てゐるだけ。この服は目立つし、
金になるなら売り払つてこちらの普段着を手に入れよう。

俺はそのおつさんの前に立つた。

「こひつしゃいーねや? その格好・・・貴族の坊ちゃんかい。こん
なとこひつてると色々危ないぜー。」

貴族の子息と勘違ひしてゐるようだつた。

「いえ、大丈夫ですよ。心配には及びません。といひで服を売りた
いのですが良いですか?」

やうこうと店主は何やら驚いた表情をする。何かおかしなことを
言つたのだろうか。

「あ、ああ。かまわねえよ・・・いや、すまん。貴族に敬語で話
されると何だか妙な気分になるもんだな。・・・『ホン、坊ちゃん
はお忍びなんかで? まさか家出だつたり いや、詮索はや
めとひづ。』

「ええ。 そうしていただければ幸いです。」

とりあえず、勘違いに乗ることにする。まだ追われている可能性もあるのであまり留まりたくない。さつさと服を買ってこれからのことを考えなければならない。

「まあ そうだろうよ。 どれ、 服を見せてもらおう。 ···· ああ、 これを着とくといい。 安心しな、 古着だが質は悪くないから。 貴族の坊ちゃんは気に入らないかも知れねえが。 ガハハ」

「いえ、 ありがとうござります。 助かりました。 御代は ···· ?」

「そんぐらーザー サービスするぞー。 つちらみみたいな旅商人は店持つての連中と違つて信用があんましねえからなー。 サービスでもしねえと密が寄りつかねえって！」

そういうと店主はまた「ガハハ」と笑つて服の品定めに入った。 体格は、 ごついけど、 柔和な感じの顔と一緒にで、 やっぱり良い人だったようだ。 でも、 なんだか商人つて感じがしないな。 想像していた商人つて、 何かこう ···· 脂ギッシューな豚のような、 強欲なイメージ? だつたんだが。

「ほお。 こいつあ変わった生地してるなあ ···· つるつるして肌触りも良い。 何より縫みてえなつやしてやがる ···· 。 それにこの襟つきの白シャツ、 おしゃれな貴族がよく好んで着ているが ···· これほど薄くて丈夫なのは見たことねえな。 ···· 」

そういうと店主は何やら考え込む。 何か駄目だつたのだろうか。

「坊ちゃん。 こいつあうちでは買い取れねえ ···· 」

「え？」

やはりあまり価値が無いものだつたのだろうか、そつなると飯や宿のお金が無くて野宿することになつてしまつ……ある程度のお金にはなると思つたんだが。

「こいつはかなり貴重なものみてえだし……うちは値段が付かれねえ、おそらくだが上着とシャツだけで100万ギルは下らないだろ?」

「100万ギルですか……? それってビのくらいの価値なんですよ?」

「ん? なんでえ、お金の価値がわからんねえのかよ! ……つたく、これだから貴族の坊ちゃんは。まあ、あんまりこの平民区画にこねえ『上』のほうの貴族の子供は金の価値を分かつてねえ子が結構居るつて聞いたが……まさかここまではねえ。」

そういうと、店主は参つたと言わんばかりに頭をかいた。恥を忍んで聞いたが、金の価値を聞いておかないとこれから先困ることになるのは目に見えている。

「すいません。余り、外のことを探らないもので。教えていただけないでしょうか。」

「Jリでは貴族の坊ちゃんで通す。

「ああ、まだ暇だしな。相手してやるよ。……ビのくらいしらねえんだ?」

「まつたくです。」

「まつたくか・・・。」

「まつたくです・・・。」

店主は呆れたような諦めたような顔をして、ひとつ袋から4種類のコインを取り出す。

「まずはこいつだ、これはイヤクール銅貨だ。ここ、イヤクール王国で保障されている貨幣だな。この銅貨一枚で5ギルだ。・・・ああ、ギルって単位は世界各國の商人組合によつて決められたものでな。たとえば、同じ金貨でも国によつて金の含有量に差ができるわな。そうなると同じ金貨でも価値が変わつてしまい、貿易がしにくくなる。そこで貨幣とはまた別にギルという単位を作つたわけだ。」

つまり、貿易するときに相手が金含有量の高いA国の金貨10枚、自分が含有量の高くないB国の金貨10枚を持つていたとしても、それは同価値ではない。だがそれを考えていくと、多數ある国の金貨の相互関係を覚えていくより『ギル』という基準を作つてしまつたほうがやりやすいということだろう。・・・どこかの金貨を基準にすると、それはそれで争いを招く事態になりかねない。こういうこともあるそうだ。

そして、店主が言つたのは主にこの『イヤクール王国』で使われているのはイヤクール硬貨であるらしい。価値は、銅貨が5ギル、赤銅貨が100ギル、銀貨が1,000ギル、金貨が1万ギルとなつてゐる。

「硬貨の種類の数も国によつちやあ違つからな。貨幣に数字が書いてあるだろ? これがギル数だからギルを覚えときやあ何とかなる。俺たち商人は書類上で取引することもあるからいろいろ覚えなきやなんねえがな。普通に暮らすなら、ギルの価値と硬貨の数字を見りや暮らせむわ。」

「ありがとわざこます。参考になりましたー。」

そうこうと店主は照れくわいにした。すうへいの人です……この人。

「しかし、悪かつたなあ。今そこまで持ち合わせがなくてよ。組合に寄れば金が下せるんだが……。今日は売るつもりで来てたんだなあ。」

「いえ、構いませんよ。無理を言つたのはこちりですか。」

「へえ。わつきから思つてたんだが、坊ちゃん全然貴族らしくないな。普通もつとふんぞり返つてるもんなんだが。」

その言葉にドキッとするが、何とか「まあそういう貴族も居ますよ」みたいなことを言つてしまかす。正直、いつボロが出るやい。

「ふーん、どうだい。これも何かの縁だ、少し待つてくれねえかい? 今日はもう店置んじまうから。」

そうこうと店主は一カツと皿に歯を見せる。

「え? もうですか?」

まだそこまで日は暮れていないし、人通りも大通りならまだま
ある。

「ああ、珍しい服だしありぱり興味があるのさ！それに今日はもう
密はこねえ『気がする！』

気がするつて・・・本当にこの人は商人なんだろうか・・・。

第4話（後書き）

少し書き方を変えてみました。

第5話

暫く待つていると、露店を置み終えた店主が歩いてくる。恐らく5分とかかっていないだろう、店を置むにしては物凄い早さだ。

「わりいね坊ちゃん。待たせちまつたかい？」

「いえ、大丈夫です。」

「そいつあよかつた。じゃあ組合まで着いて来てくれるかい？金を下しちまづから」

俺は「ありがとうござります」と一言お礼を言つて、店主についていくのだった。

暫く歩くと、赤いレンガの目立つ大きな建物に着く。店主曰く、ここが商人組合なんだそうだ。商人組合は、冒険者ギルド、傭兵団に並ぶ民間組合らしい。大体の商人はここに登録して、組合会費を払う。そうすることによって組合の様々な恩恵が得られるというわけだ。

「その中のひとつが、この預金システムだな。この預金証があれば、各組合でお金が引き出せるのさ。」
「このおかげで盗賊による現金の盗難被害がかなり減つたらしい。」

商人組合ではかなり魔道具が導入されていて、他のギルドに比べ

て技術の発展が早いらしい。

(商人に冒険者、傭兵や魔道具・・・そして魔法。)

様々な単語が出てきて改めて異世界に来てしまったのだと痛感する。だが、沈んだ気分の中にもわくわく感あるような、不思議な気分だった。

「あれ？ あの人たちは冒険者ですか？」

建物の中に入つていくと、武装した人がちらほらと見えた。

「ああ、あれは俺と同じく旅商人つてやつだ。旅商人つてのは、1箇所に店を持たず、色んなところを旅して回る商人なんだが・・・まあその性質上、盗賊や魔物に出会うことがしそつちゅうあるからな。ある程度露払いができるねえとダメなさ。」

そういう店主を見ると、所々に傷跡が見える。

「護衛がつけばその分商品の値段も上がつちまうからな。それなら自分で自分の身と商品を守れるようになりやいいのさ。商人根性もここまでくりやあ誇らしいもんさ！」

そう言って店主はガハハと笑う。

店主がお金を下すと、俺にそれを渡す。小さめの袋を開けてみると金貨がたくさんあった。

「ある程度小銭も混ぜておいたから支払いに困ることはないだろ?」

「

店主は再びガハハと笑うと、俺の背中をポンポンと2回叩く。

「ありがとうございます。……えっと、店主さん。」

「ああ、そういうやあ名前を言つてなかつたか、俺はマハットだ。貴族様に自己紹介つてのも何だか妙な感じだな! ガハハ!」

ちぐりと胸が痛む。嘘はあまり吐きなれないのだ。

「ありがとうございます。」

消え入りそうな声だつた。それでもマハットさんは豪快に笑つてくれた。

「いひつてことよー困つたときはお互い様つてのを信条に生きていからなー!」

マハットさんはその大きな拳で大きな胸をドンとたたく。その姿を見ていると、なんだか嘘を吐いているのが心苦しくなる。言つてしまいたい気持ちと、まだ会つてすぐの人間に言つて良いものかといつ気持ちが心で鬱々あつている。

「…………何か辛い事があつてここまで来たのか?」

はつとして、マハットさんの顔を見る。どうやら妙な顔をしてしまついたらしく。慌ててこまかそうと思ったが、この言葉を言つ

たマハットさんの顔を見ると、まるで自分のことのようだ心配してくれるようだった。その言葉と表情が俺の背中を押した。

「信じられないかも知れませんが……実は

「この世界に来た時のこと、来てから何があったのか、ここ今まで至る経緯を正直にマハットさんに話す。PICOのことは上手く説明できなかどうか分からぬが、マハットさんは「情報を扱う魔道具のようなものか。」と納得していた。

「以上がここまできた経緯です。嘘を吐いてしまって。
……」めんなさい。

話している間、マハットさんは驚いた表情を見せたり、何やら考え込むような表情をしていたが、最後まで口を挟まず聞いてくれた。そして、俺が最後まで話したあと頭を下げるトマハットさんはポンと肩に手を置いた。

「まさか異世人だとは思わなかつたが……確かに何か隠してある気はしていた。貴族にしては偉ぶつて無かつたしな。」

俺が顔を上げると、マハットさんは一カツとまた白い歯を見せて笑ってくれた。

「恐らくそいつあ召喚魔法の一種だとは思うが……そういえば

「！」

マハットさんは何かを思い出したように再び腕を組む。人と話すときの癖なのだろうか、マハットさんはいつも腕を組んでる。だが柔軟な雰囲気を持っているので、余り威圧感は感じない。『余り』というのは、マハットさんは大男だ。そのあたりに嫌でも感じてしまうのかもしれない。俺が身長一七五くらいあるのだが、マハットさんは俺よりも二十は高いだろう。そして鍛え抜かれた筋肉、筋肉だるまというほどではないが長年戦つてきて洗練されている気配を感じる。それはうつすらと見える無数の生傷がそう見せるのかもしれない。

「異世界者の話を聞いたことがあった。」

「え？ 本当ですか！？」

マハットさんの言葉に、今度はひかりが驚いた。

「ああ、確かに何かの文け・・・・いや、どこかで話を聞いたんだが。

「

マハットさんは思い出すよつて頭に手をやる。無精髭が似合つ顔に、若干短めにそりえた赤茶の髪と瞳。いかにもダンディーな感じのおっさんだ。

「まあ、伝説のようなものだ。・・・・1000年ほど昔、坊ちゃんと同じように黒髪黒目の中世界者が、そのときには大規模な魔術が使われて召喚されたらしい。」

マハットさん曰く、魔法は陣陣や記号を使わない術、魔術は陣や記

号を媒体にした術だそうだ。魔法は個人の魔力によって効果が変化するが、魔術は媒体に決まつた魔力量を練りこめば誰にでも使えるらしい。

「その時代は世界聖戦時代と呼ばれていてな、この世界は3つの国に分けられていたらしい。それは三竦みの状態になつていて長年平和な状態が続いていたらしい。」

「こちらみ合いが続いていたということですか？」

「そういうことだ。ビニの国もあわよくば霸権を……といふことだな。」

そういうと、マハットさんは周りを見渡すと場所を移そうと言った。商人柄あまり情報というものは漏らしたくないらしい。それにそろそろ飯時だ、マハットさんに情報量代わりに飯代ぐらい出させてくれと言つたら「いいのか？そんなこと言つて。」と言つてニヤリと笑う。

（案外この人はお茶目な人なのかもしれない……。）

そう思いながら、自分の言葉は少し早まつたかもしれないと後悔するのだった。

俺とマハットさんは、マハットさん行きつけの居酒屋兼宿屋のお店に来ていた。そこまで大きな店ではないが、それなりに繁盛しているようだった。マハットさん曰く（これも定番のようになつてきたが）、この店は熟練の冒険者や商人が集まるらしい。どうやらこの女将さんが有名な冒険者だったらしく、自然とそういう人たちが集まるらしい。

「よつ、レベッカ！ 相変わらず繁盛してんなあ！」

マハットさんはカウンター席に座ると女将さんに話しかけた。

「なんだい、嫌味かい？ あたしとしてはもつとあんたらが宣伝してくれてもいいんだけどね。」

レベッカさんは恐らく30代後半から40代前半くらいだろうか、かなりの美人さんだった。暗めの緑色の髪を後ろで縛つていて、落ち着きのありそうで快活な雰囲気、女傑といつていいだろう。そういう雰囲気を持っていた。

「お~おい、こんだけ質の良い連中が集まつてんだから余計なモンはいらんだろつ。」

「あたしはもつと人が来て繁盛してもいいんだけどね。」

レベッカさんがそう言い放つと、周りの客から軽い笑いが起る。

「馬鹿みたいな商人や新米の生意氣な冒険者が来るとなつまみ出す癖

「よお。」

「ふんー。氣に入らなこ密せつひのけひにや要らなこれー。」

セウコウヒ、ふんと胸を張る。マハットさんはガハハと笑うとレベッカさんにホールと飯を2人分頼んだ。

「セウチの子は?えらべ変わった色してるナゾ。」

レベッカさんは俺のほうを見ると、珍しそうに髪や皿を見る。だが、その間も料理している手は休めない。

「ああ、良くて聞いてくれたー。うちの客として来たんだがな、聞いて驚くなよ・・・」の坊ちゃん、異世界から来たらしき。」

マハットさんがセウコウヒ、レベッカさんは「そんな冗談、信じるわけ無いでしょ?」と笑い飛ばす。だがマハットさんが経緯を説明していく、黒髪黒皿といつのものあつてなんだか妙な雰囲気になっていく。

「・・・確かに、黒髪黒皿つてのはこの国にゃあいないけど、でも、だとしたらまた戦争でも起るってのか?」

「戦争・・・ですか?」

俺がそう聞くと、レベッカさんは困ったような顔をして俺とマハットさんにホールを出す。

「世界聖戦の話は知ってるかい?」

世界聖戦。さつきマハットさんから少しばかり聞いたものだらうと、俺が頷くとレベッカさんは肉料理を2人分作り終えて俺とマハットさんに出し、カウンターの内に置かれた向かい側の椅子に腰掛け話しかけ始めた。

「ある程度はマハットに聞いたみたいだね。世界が戦乱に飲み込まれていた時代、世界聖戦時代・・・3つの国が三竦みになつていた時代は『黄金の時代』と呼ばれていてね。3つの国がお互いを牽制していくつかの間の平和が訪れていたのさ。」

レベッカさんは「まあ、そのマハットに聞いた話だけね。」と言う。民間には余り知られていないものらしい。なので黒髪黒目は確かに珍しいが、この話を聞いても知らない人の方が多いので気にしなくても良いと言われた。俺は、はいと頷くとエールを呷つた。
「その平和が崩れた原因ってのが、大召喚魔術による戦士の召喚だったのさ。その戦士ってのが黒髪黒目だったと伝わっていてね・・・非常に強力な力を持つていたらしいわ。」

「強力な力ですか・・・？」

「そうさー！膨大な魔力、千手先を読むとまで謳われた知略、そして圧倒的な武術戦闘。これらを兼ね備えた最強の戦士だったわけさ。」

「本当かどうかはしらねえがなーガハハ！」

マハットさんはそう言いながら既に4杯目のエールに口を付けていた。もう出来上がりつつあるようだ。

「でだ・・・他の2国がそれを知つてね、水面下で手を組んでその

国を攻め入ったのさ。」

レベッカさんは少しばかり劇調に話し出す。それを聞いて他の飲んでいた冒険者や商人も集まり、盛り上がり始める。皆酒が回り、まるでと言つかまんま宴会になつた。

「だが、その黒い戦士の活躍によつてその2国を逆に滅ぼしちまつたのさ。その黒い戦士は国では英雄と呼ばれてひとつのお宗教のようになつていつたそうだ。」

「そつからが面白い話ですよ！その黒い戦士は人望を集めすぎたんだわ。王様以上にな！」

マハットさんが語りを引き継ぐが既にでろんでろんになつてゐる。いつの間にか、おそらく8杯目のエールが注がれていた。

「それを妬んだ王様がその英雄を暗殺しようとした訳よ。だが、知略にも優れた英雄はそれを予想してたわけだ。そこで、王様の計画した暗殺は失敗に終わつちまうのさ。・・・・だが、それで終わりじゃなかつたわけよ。」

マハットさんはカウンターに身を乗り出ると、わざとらしく押し殺した声で言った。ホールをしつかりと握りながら。

「英雄は自慢の智謀をめぐらして逆に王様を貶めたんだ。そして、人望のある英雄は王の死後、統一国家の主となつたわけだ。・・・・だがその英雄も月日が経ち病に侵されてしまう。死期を悟つた英雄王は3人の息子にあるものをわたすのさ。」

「あるもの？」

そう問い合わせるとマハットさんはにやりと笑い。一度エールに口を付けると語りだした。

「林檎さ。」

「……林檎？ 林檎ってあの果物の林檎ですか？」

マハットさんは俺の反応をみて再びニヤリと笑う。この話を聞いたことの無い冒険者や商人も多いようで、その人たちがマハットさんに先を話すよう急かす。マハットさんはその反応がうれしいようで「どうすつかなあ。この先は有料にすりやお金とれつかなあ！ ガハハ」と冗談を飛ばす。だが、しかたねえなあと続きを語る。

「3人の息子に、それぞれ自らの力を込めた林檎を渡したのさ。その林檎は『3つの黄金の林檎』と呼ばれ、それぞれ『知力』、『武力』、『魔力』を司つていたらしい。その林檎を受け取った3人が英雄王の亡き後、国の頂点に立つていたのさ。……だが、頂点が3人もいる訳だ。再び国は3つに割れる事になる。そして現代まで続く長い戦乱の世が再び訪れたわけだ……。」

先ほどまで騒いでいた人たちも、話を聞くために静かになつていた。レベッカさんが空になつた俺のグラスにエールを注いでくれる。

「3人の王は自分以外の持つている『黄金の林檎』を欲したのさ。だが、3人の国は力が拮抗していたんだ。英雄王は再び三竦みで平和をつくろうと思ひ、息子らにそれぞれ3つの力を渡したようだつたが……息子らの強欲までは見通せなかつたのかもしけんな。」

英雄王は自分の息子たちを信じていたのだろう。だからこそ、国

を守るための力を渡した。だが、息子たちはそれを裏切ってしまったわけだ。だがそれほどまでに林檎の力というものが、それぞれ強力であったのだろう。

「欲望に駆られた3人の王は三国を・・・世界を舞台に大きな戦争、いや、3勢力入り乱れの乱戦を引き起こしてしまつ。・・・そしてその結果、今のように小国家も大国家もある世界になつてしまつたわけさ。」

「おーーーその、3つの黄金の林檎つてやつはどうなつちまつたんだよー。」

聞いていた髭面の冒険者が割つて入つて聞く。

「ああ、その戦乱中に破壊されたのか・・・その、三国の面影がある大國家に受け継がれているのか。はたまたどこかに封印されているのか・・・。」

「・・・行方が分かつていないとこいつことですね?」

俺がそういうとマハットさんは肩を竦めた。

「まあ所詮は伝説や御伽噺の類だしな。1000年も前の歴史なんてここいらの小国家じゃわかんねえよ。」

そういうてマハットさんは15杯目のエールを注ぐのだった。

第6話（後書き）

今回は昔語り中心でした。3つの黄金の林檎は「存知ギリシャ神話」からアイディアを頂きました。

第7話（前書き）

小説の紹介文が一番難しいですね；

その後、酔いつぶれたマハットさんを数人で部屋へ運び込む。俺はレベッカさんに2人分の飯代と宿代を払うと、思いのほか安くて、二人合わせても100ギルちょっとだった。宿も2食付で一人当たり50ギルと安かった。レベッカさんが言うには大体これが一般の民宿の相場なんだそうな。今回の食事代はマハットさんが飲みすぎたせいで若干高くついているくらいだとか。

「ありがとうございました・・・やっぱり結構重かったですね。」

手伝ってくれた他の商人や冒険者の人たちにお礼を言つと、「このくらい平気さあ！伊達に冒険者やってねえぜ！」と俺の肩を叩く。こここの店に集まる人は良い人が多いらしい。レベッカさんの影響が強いのもあるが、余り良い噂を聞かない人物には元々誰も教えないらしい。

「坊ちゃんも大変だな。俺たちでよかつたらいつでも手伝つぜ！」

「そのときは割安でお願いしますね。」

笑いながらそう返すと、こりやまいったねえと笑いながら1階の酒場へ降りていった。しかし、マハットさんが俺のことを坊ちゃんと呼ぶからそれが定着してしまった。どうにかならないもんかと苦笑いしつつ、俺も用意されたベッドへ入るのだつた。

「…………ぐうつ…………くあ？」

朝起きると異様な光景を俺は見た。木で作られた天井、少し固めのベッドで、もうひとつベッドで寝る茶毛の髪面のこいつおつさん。一瞬、自分がどこに居るのかが分からなくなつたが、昨日あつたことを思い出した。

(・・・・そういうやあ、異世界に来ちまつたんだな。)

気分が沈みかけたが、桶に用意された水で顔を洗つて気持ちを切り替える。用意されていたタオルで顔を拭くと、俺は1階の酒場へ降りていった。

酒場に下りると、レベッカさんが朝食を用意してくれているところだった。

「おはようございます。レベッカさん」

「あら、おはよう。よく眠れたかい？」

「はい、気持ちよく寝られました。」

「そいつは何よりだよ。この世界に来たばかりじゃあこっちの食事や寝床は会わないんじやないかと思つたんだが、杞憂だったようだねえ。」

レベッカさんはそういうって笑つと、シチューのよつなのを出してくれた。良い匂いがして、食をそそる。一口食べると口の中に野

菜や肉の皿みが広がる。とてもおいしかった。

「「これからどうするんだい？」

「・・・正直、分からないです。帰る方法を探そつかとも思つんですが、手がかりがその黒い英雄の話しか今のところ無いので、どうしたら良いや。」

来たときのことでもこの電源を付けるまでのことしか覚えていないんじゃ、どうやってこっちの世界に来たかも分からない。今はマハットさんに服を売ったお金もあるし、暫くはここにお世話になるのもいいかなと思っていた。しかし、そう思い通りにことが運ぶほど、この世界は甘くなかった。

「失礼するーーーーーの店主はこるかー！」

マハットさんを起っこ、一田酔いでへ口へ口になつているマハットさんを支えながら階段を降りようとすると、店の入り口から大きな声がした。すると、マハットさんが俺の歩みを止めた。

「？」

マハットさんは人差し指を口に当てて静かにするよつ延す。

「・・・」

少ししてレベツカさんが出でくる。入り口のほうが影になつてよく見えなかつたが、訪ねてきた者たちが店に入るつて来ると俺は一瞬で緊張した。

(あの屋敷にいた兵士だ!)

銀色の軽鎧を着て、紋章の入つたサーベルを装備している。数は5人、屋敷でも見た隊長格らしき人がレベツカさんと何やら話している。

「 . . . アガット家の紋章つてこたあ『十一貴士特別騎士団』だな、ありやあ。」

互いに聞こえる程度でこことと話す。

「十一貴士・・・特別騎士団、ですか?」

「ああ、ここイヤクール王国には王様から特別な勲章をもらつた12人騎士が居てな、そいつらに仕えるそれぞれの騎士団をまとめて『十一貴士特別騎士団』と呼んでいるのさ。普通の騎士は王様に直接仕える身分だから高い身分を要求される。まあほぼ貴族の血筋でなければなれないわけだ・・・だがこの特別騎士団は王国ではなく、それぞれ12の家に仕える身だから実力さえあれば身分が無くともなれるのさ、その12人の内誰かが認めればな。」

まあその分騎士よりは身分は低くなるがな。と一言付け加える。だが実力で選ばれるということは、それぞれがかなりの実力を持っているわけだ。中でもマハットさん曰く、あそこに居る副隊長は若くしてかなりの実力を持つらしい。

(あれが隊長じゃあなかつたのか・・・)

歳は20代前半と言つたといふだらうか、他の兵士と比べて若干鎧が豪華だ。頭には赤色のバンダナを付けて、腰には少し短めの剣を2本挿している。

「ここに黒髪の男が入るのを見たといつ情報が入つている。隠せばためにならんぞ。」

副隊長は高圧的にレベッカさんに詰め寄るが、レベッカさんは腰に手を当て一步も退かない。

「何のことだい? つけこみはそんな客來てないよ。確かな情報だつたのかい?」

なんとも強気に出るレベッカさん。副隊長のこめかみが一瞬ピクツと動いたような気がする。またに一色即発の場面。

「調べる。」

副隊長が他の4人に指示を出す。まずい、こいつに来るー。

「まちな! 人の店勝手に引つ搔き回すんじゃないよー調べたかつたらそれなりの書状を持つてきなーー。」

レベッカさんが一喝すると、その迫力に兵士の足が止まる。すぐが名の知れた冒険者だつたことはある。だが、副隊長だけはまつたく動じなかつた。

「……王国名譽騎士のパルテイン・アガット様に既に許可は貰い受けている。」

副隊長はそういうと穏から一枚の紙を取り出す。

「なつー？・・・アガット家の当主が出張つてんのかい！？」

「坊ちゃんよ、いったい何やつたんだい？当主の書状があるつてのは指名手配犯よりも優先的に捕らえんつて意味だぜ。」

マハツトさんが呆れた顔で俺に聞いてくる。断言してもいいが、俺は何もやつていない。

「・・・なんとか、話をつけてきます。ちゃんと話せば分かつてもうかると思いますし。」

「やめときなつてー最悪殺されちまうかもしねえぞー！」

ちゃんと状況を説明すれば矛を引いてくれるはず。それにレベッカさんやマハツトさんに迷惑は掛けたくない。そう思い、俺は階段を下りて兵士たちの前に姿を現す。

「俺はここに居るが……」

「痛ッ
！」

酒場に出て行くと、すぐに取り押さえられ手首に縄を巻かれる。血が止まるかと思つほど強く結び付けられた縄は何やら、薄っすらと光を放っていた。

「魔法を使おうとしても無駄だぞ。それには封魔の魔術印が刻まれている。」

魔法を使うも何も俺は何も使えないから意味は無いんだが、何を言つても取り合つてもらえないだらう。とりあえず、縄を爪で削ろうとしてみる、が。やはり光の膜のようなものが邪魔をする。

「……魔法が駄目だからと言ひてその程度の物理干渉で千切れると思ひつな。阿呆め。」

(あ、阿呆だと…?今こいつ俺のこと阿呆と言いやがったのか!よーし、分かったこいつは気にいらねえ!絶対に仲良くなんて無理な奴だ!あと絶対こいつ友達いねえ…!)

その後、屋敷に着くまでずっと奴を睨み付けていたが、奴はまったく表情を変えなかつた。屋敷に着くころには奴のことを『鉄仮面』と心の中で呼んでいた。

屋敷の壁は1日で修復されていた。一体どうやったのかは知らないが、恐らくこれも魔法というやつだろ？

屋敷の中に連行されると、俺は大きな教会のような部屋に通された。ただ、教会と違うのは十字架の代わりに特別騎士団がつけていた紋章、つまりアガット家の家紋が掲げられていることだ。そして壇上には大きく、豪華な椅子。まるで王様が座るよう作られた椅子が置かれている。

「ここで待て、もうすぐこの家の主であり名譽騎士であるバルディン様がいらっしゃる。命が惜しくば大人しくしているんだな。」

そういうと副隊長は俺を『王座』の前に跪かせるところほど後ろで待機した。周りは他の兵士で取り囲まれる。

(・・・・人が増えてきた。)

最初にこの部屋に入つたときにはちらほらと数人いる程度だったが、俺がここに来てからは人が増え続けていた。そしてその中には見知った顔もあった。

(・・・・あの子だ！）

その赤髪の少女は入り口から伸びる赤い絨毯の引かれた『王座』へと続く道を歩いてくると、両脇にある椅子の最前列に座った。

(何だかんだでこいつが原因なんだよなあ。でもまあパンツ見てたのは俺だしなあ・・・。)

そんなことを考えていると後方の扉が開く。そこには少女と同じように燃えるような赤髪をした40代くらいの男がいた。豪華な鎧を身に着けている様はまさに騎士だらう。何よりも、素人目からも分かる『強さ』がある。力や意思・・・何をもってもこの人を倒すこととは出来ないのでと思わせるほどの威厳に満ち溢れた人だった。

ザザツ

その場に居た俺以外の人間が全員立ち上がる。兵士に限つては敬礼しそうな勢いだった。その男が跪いている俺のすぐ横を通り過ぎ、『王座』に着く。

「楽にせよ。」

その男の言葉に、この場に居る俺以外の全員が従う。日本という国では、絶対に見ることの出来ない『王者』がそこに居た。

「貴様が私の結界を破ったといつ者か?」

視線がこちらに向く、その目は深紅の光を宿していた。

「違いますー俺は結界を破つてもいいし、壁も壊していませんー!」

「で、あらうな。」

正直、帰つてきた言葉には拍子抜けをした。

「・・・えつ？な、何故

」

「壁は内側から壊されていたであらうへ、破片が外に向かつておつたからな。・・・そして壁の焦げた跡と規模を見れば、恐らく爆発系^{エクスプロ}魔法。^{エジヨン}そうであらう・・・リリーナよ。」

男は最前列に座る赤髪の少女に目を向けた。すると少女は立ち上がり、男に向かつて一礼する。

「仰る通りですわ、アガット卿。あの壁はわたくしが誤つて破壊したもののです。」

少女の言葉にざわざわと会場がざわめく。しかし、では

「では、何故。私がここに貴様を連れてきたか・・・・そう聞きたいのであるつ？」

一瞬心が読まれたかと思い、心臓が跳ねた。

「簡単なことだ、黒髪黒目^{マツコ}の青年と報告を受けっていたのでな。興味が沸いたのだよ。」

男は肘掛に肘を立て頬杖をつくと、ねぶるよつて俺を見る。いやつきとも微笑ともとれるその笑みに俺は苛立ちを覚えた。

「『黒き英雄王』といふ話がある。」

「知っています。俺が捕まつた店の女将さんに聞きました。」

自分でも少しばかり語気が荒くなるのが分かつた。だが、この男は俺のこの様子を見て笑みをさらに強くした。

「なかなかに物怖じしない小僧よ・・・やはり連れてきて正解だつたわ。 繩を解いてやれ。」

男がそういうと、副隊長が一瞬戸惑つたが繩を解いた。少し手首を回し、指先の感覚を確認する。

「小僧。特別騎士団に入るつもりは無いか?」

「いえ、興味が無いもので。遠慮しちゃります。」

俺はそういうと来た道を戻る。追つてくる者は居なかつた。

第8話（後書き）

毎回喜びがまちまちで「みんなさー」。

第9話（前書き）

皆さんも風邪には十分ご注意ください。
間違つても点滴など打たれないようにー。

それと第4話、第5話の冒頭で違和感を持たれた方がいらっしゃったと思いますが、大分文章が飛んでいたようです。修正しました。
申し訳ありません；

第9話

高民団画を抜けると、俺はそのままレベッカさんのお店に向かう。マハットさんとレベッカさんは心配をかけてしまつただろう。まずは2人に謝りに行かなければならないと思つ。

「……………ん？」

何やら視線を感じて、周りを見渡すと遠巻きに見ている人が数人いる。忌々しげに見るものもあれば、不安そうな顔でチラチラと見る者もいる。総じてあまり良い視線ではなかつた。

（そつか……朝、俺が連れて行かれるのを見た人もいるんだよなあ。）

騎士団数人がかりで連れて行つた男だ、こんなに早く出てきて不信がるなど言うのも無理な話だろ。しかし、俺自身は特に何もしていらないのにこんな不条理な扱いを受けると何だか落ち込むのも当然だと思って、嫌な顔をするのは許してもらいたい。

「黒は目立つから分かりやすいなあ！ガハハハハ！」

驚いて声のした方向を向くと、マハットさんが立つていた。マハットさんは嫌な視線など気にしないと言わんばかりに俺に近づいてガハハと笑い、肩を組んだ。

「ちょ
よー!?」
「マハットさんーあなたまで変な視線で見られます

「何構わんや。この街に店持つてゐる説じやねえしなー。」

ガハハと笑うマハットさん、この人は不安を消し飛ばしてくれる。異世界に来て間もない俺を世話をしてくれるし、何故この人はここまでしてくれるのだろう。そう思つと聞かずにはいられなかつた。

「何で、マハットさんは・・・そこまでしてくれるんですか？」

呟くよくな声だったが、マハットさんは俺の言葉を聞きポンポンと二回俺の背中を叩くと、またガハハと笑つた。

「金のやり取りだけなら他人、だが酒を飲み交わせば友人さ！簡単なこつたろう？」

実に簡単な言葉だつた。だが、その言葉が心に沁みていくのが感じられる。どんなにクサイ台詞でもこの人が言つと様になつてしまふから不思議だ。

「ありがとうござります。何だか楽になりました。」

「ガハハ！坊ちゃんは礼言つぱつかだな！」

そういうでお互いに笑あつと、自然と視線は気にならなくなつた。

「もうかい、結局ついて行く事にしたんだねえ。」

レベッカさんの店に帰ると、マハットさんから街に屈辛いなら一緒に来ないかと提案を受けたのは昨日のこと。嫌な気分はレベッカさんの店の常連客やマハットさんたちと飲んで騒いでいたらどこかへいつしてしまった。

「はい。どちらにせよ身を立てる方法を見つけるなりして、元の世界へ帰る方法を探そうと思つていましたから。」

情報が1000年前のことだ、そう簡単には見つかることは思つていいない。とにかく暫くは生活していく環境が必要だ。帰る方法を探し出しても死んでしまつたら意味がない。ある程度は生きていくためのスキルが必要だらう。

(やつぱり、色んな場所へ行ける旅商人か冒険者あたりがいいよなあ・・・でも、身を守る技術なんて無いし。何か格闘技とか武術でもやつてりゃ良かつたなあ。)

「おーい、タケル！」うちに手を貸してくれ！』

マハットさんに坊ちゃんはやめてくれと頼むと、「いやあ俺は坊ちゃんの名前しらねえしなあ。」と言つていてまだ自己紹介をしていないことに気づいたのも昨日のこと。かなり親しくなつたと思っていたが自己紹介もまだだったとは、何だか笑えてくる。

「はい！今行きます！」

マハシトさんの荷馬車に荷物の積み込みが終わると、御者^{みやこ}のマハシトさんの横に座る。木の板に座っているので結構痛い。

「マハシトがいるから心配ないと想つけゞ^{おもてつけづ}をつけて行つてきなー。」

出立の時刻になると、街の入り口までレベッカさんが見送りにきてくれていた。店が忙しくなるのは夕刻だから大丈夫だと言つていたが・・・宿屋も兼業しているんじやなかつたのだろうか。

「はーーお世話になりましたー。」

「またここいらに来ることがあればまづ寄つていきなー。安くしておくよ。」

レベッカさんはそういうと、キャスケットを俺の頭にかぶせる。どこに持つていたのだろうか。

「あなたの黒髪は田立つからぬ。女物だけど我慢してつけついだいな。」

「

「・・・いえ、ありがとうございます。大事に使わせてもらいます。

」

帽子を深く被つて顔を隠す。間違いなく泣きそうになっているはずだ。こちらに来て色々あつたから少しばかり感傷的になつているのかもしない。

「じゃあ出すぜ。世話になつたな、レベッカ。」

「いつも通り飲んで騒いでただけじゃないか。そんなもん世話をしたううに入らないよ!」

レベッカさんがそつこいつとマハシトさんはいつも通り「ガハハ」と笑うのだった。

第9話（後書き）

点・・・滴・・・・

天成天籟の騎士

私が特別騎士団の副隊長から報告を受けたのは、私がパルデイン様と屋敷に帰つてきてすぐのことだった。そう、私がリリーナ様の部屋へ運び込んだ黒髪の青年が逃げ出したとの報告。いや、実際に彼が屋敷の壁を破壊し、侵入。そしてリリーナ様に危害を加えようとしていたところに騎士団が駆けつけ、応戦したが逃げられた···と言づ報告だつた。

(まあ、本当のところは違うが···一応この通りにパルデイン様に報告するか。)

あのリリーナ様のことだ、相手の貴族の『子息に腹を立て魔法をぶつ放したのだろう。

(まったく、パルデイン様と良いリリーナ様といい。もう少し家臣の身にもなつて欲しいものだ。)

かなり気が重かつたが、私はパルデイン様の待つ『騎士王の間』へ向かつた。

「失礼いたします！」

『騎士王の間』とは、パルデイン様に付けられた通り名に由来する。現在パルデイン様が当主のアガット家は王国12大貴士家のひ

とつで、この国では王家の次に位が高いもののひとつである。12
家の中でも最も戦闘力に秀でた家であるアガット家は、戦争のたび
にその功績を挙げ、王の信頼を得てきた。

「ウイルナーか、何用か？」

その歴史あるアガット家の中でも、最強と謳われた現当主。パル
ディン・アガット様は恐らくこの先何百年と語り継がれて行く方だ
らう。

「 報告申し上げます。」

私が副隊長から受けた報告をそのまま申し上げると、パルディン
様はにやりと笑う。

「・・・黒髪に、黒田か。」

黒髪黒田で思い出せるのは『黒き英雄王』のお伽話である。10
00年前、それこそ本当かどうかも確かめる術などありはしないの
に、このパルディン様はまこと話だと言つ。

「我が書状を出さう。今すぐその男をここに連れて來い。」

「・・・どうされるお積りで?」

私がそう聞くと、パルティン様はフッと一瞬笑うと椅子に深く腰掛ける。

「どうするも何も、私の力となるな」ほ良し。ならぬなら害悪となりぬよつあるまで。」

「それは、始末するところの意味で？」

「……好きことひて構わぬ。」

私は一礼すると、騎士王の間を離れた。

「ウィルナー隊長ーその役目、私にやらせてくださいー！」

私が数人、騎士団から編成して黒髪黒目の中年青年を連行しに行こうとしていると、副隊長である、ミゲルが私に懇願しに来たのである。このミゲル副隊長は、赤いバンダナがトレーデマークでいつも両腰に剣を一本ずつ差している。実力は折紙付で、騎士団では私に次ぐ強さを持っているだろつ。だがしかし、まだ若い。歳は私の半分にも満たないため、経験も少ない。

「……相手に剣を振るわないと誓えるか？」

ミゲルは一瞬戸惑うが、すぐに「はい」と返事をする。言は取

つたが・・・不安は募るばかりか。

ミゲルに連行を任せてしまはらく、捕縛せりとの一報が入った。私はパルディン様に伝えるよう巡回兵に命令をする。

(さて、見極めさせてもらひうへ。)

私は黒髪黒目の中年の青年の姿を思い出し、謁見予定の騎士王の間へ足を向けるのだった。

第10話

街を出て街道を暫く行く。

「目的地はどこですか?」

「ああ、特に物を仕入れる予定も無いしなあ。イヤクールでは大して売れなかつたし、次はドルグアール帝国領にいつてみつか。」

「ドルグアール帝国ですか?」

マハットさん曰く、ドルグアール帝国はこの大陸で最も古い歴史を持つ国なのだそうだ。そして、『黒き英雄王』はこの国で召喚されたとか。

「『こ』が一番情報がありそだからな。逆に言えば『こ』になければ他に期待しないほうが良いということだ。」

その言葉に期待と不安で胸がいっぱいになる。

「そうだ、『こ』を渡しておこう。珍しい一品で気まぐれで買ったもんだつたんだが、俺には必要ないんでな。身を守るくれえになら使えるだろう。」

そういうとマハットさんは後ろの荷台に手を突っ込んで、1本の短剣を俺に手渡した。長さは脇差よりも少し短い位だろうか、恐らく5、60㌢くらいだろう。

「東方の国に行つたときには手に入れた代物なんだが、片刃つてのは

どうも使いたくはない。それに俺は基本的に小型の武器はつかわねえからよ。」

そう言つてマハットさんはポンポンと荷台に乗つてゐる大きな長い包みを叩く。先ほど荷物を積み込むときに見せてもらつたが、所謂『斬馬刀』といつやつだらう。身の丈ほどもあるその剣を振り回すマハットさんを想像したら身震いした。怖すぎる。

「その剣はかなり特殊なもんでよお、何でも東方の国の特殊な製造法で作つてあって特殊な効果を持つているらしい。」

「特殊だらけなんですね。」

そういうとマハットさんはガハハと笑う。そんなんみょうちくりんな物、ズブの素人の俺に使えるのだろうか。

「何、ただの剣としてもそれなりの一品や。東方の小国で採れた軽い魔法石を鍛えて作ったもんだから鉄製の武器ほど重くないしな。」

言われてみればかなり軽い。鉄と言つよりステンレスを持つているような感じだ。鞘から抜いてみると、刀身は綺麗に磨かれていた。形は日本刀のように大きく反つてはおらず、多少反つてゐる程度だ。西洋剣に近い。

「ありがとうございます。えっと、これで提げておけば良いんですね。」

マハットさんのお古のベルトを巻いて、それに鞘を提げる。このベルトは戦闘用らしく、投げナイフを差すことが出来るらしい。まあ投げナイフなんて持つたって当たらぬから意味は無いが。

「おっ。少しほまかして見えるじゃあねえか。」

今の俺の装備は、レベッカさんの帽子（白のキャスケット）・異世界用普段着（上）・異世界用普段着（下）・異世界冒険者用ブーツ・戦闘対応ベルト・東方の短剣。

（自分の身くらこは守れるかな・・・。）

「・・・しかし、帽子のせいかも知れんが。」

「はい？」

「女みたいだな。」

「・・・はい？」

マハシトさん曰く、俺は平均的な男性より細く、肌も白いらしい。やはり、現代科学の生活に浸りきつたゴリゴリの筋肉や紫外線とも無縁の生活を送っていたのが災いしたらしい。それに日本人は総じて若く見えるとかなんとか。俺が特別童顔つて訳ではないはずだ。

「いやすまん。氣を悪くしたか？どうも、冒険者や旅商人のやつらと話す機会が多いもんでな。俺みたいなやつらばかりなんだよ。」

「そ、そうだったんですね。・・・一瞬身の危険を感じましたよ。・・・。」

「こんな冗談（？）を飛ばしつつも、何の弊害も無く順調に街道を進んでいく。

マハットさん曰く、街道が整備されているところはよっぽどの魔物で無い限り近づいてくることは無いそうだ。ただ、林の近くを通つたときに入りの顔くらいある蚊に襲われたときは違う意味で心臓が止まるかと思つた。マハットさんが片手で捻り潰していたが・・・。

「む」

マハツトさんが馬車を止める。

「どうしたんですか？」

俺がそう聞いた瞬間　マハットさんが荷台に積ん

である長物を布が巻いてあるまま振るつた！

キイイイイイイイイイ
！！！

「え？」

マハツトさんが振るつた長物は俺の頭上で金属音を発した。何が起きたのか一瞬分からなかつたが、後ろをあわてて振り返ると長

身の男が両刃の剣を俺に向かって振り下ろしていたのだ。

「ほひ、私の攻撃を受け止めますか・・・・。」

長身の男は油断無く剣を引く、それに合わせてマハットさんも御者台から降りた。

「てめえ何者だ？いきなり坊ちゃん狙うたあ・・・・。」

マハットさんは身の丈ほどもある大剣を担ぐ、あたりにはピリピリとした殺氣が充満していた。

「私はアガット騎士団長のウイルナーと申します。そこそこ黒髪の子の命を頂きに参りました。」

(アガット　！…)

俺は咄嗟に腰に提げた短剣を抜く。

「やせるとと思つか？俺がよおー。」

マハットさんが咆哮とともに同時に大剣を抜き放つ。驚くことに、超重量級の武器を片手で支えている。

「大した馬鹿力ですね・・・・ですが
か？」

そういうと同時に、ウィルナーが虚空へと消える。

「チイ・・・！噂は本当だったのか。」

マハツトさんが大剣を下段で構えると呴く。

「噂、ですか？」

俺も短剣を正眼で構える。短剣だから片手のほうが良いのだろうか？

「アガツト家の騎士団長は『混合性質』だつて噂だ。」

マハツトさんは、混合性質とは例えば、風と火、土と水など相性の良い属性を生まれつき2つ持っていることを呴。めったに現れないが、その力は強力で使いこなすことが出来れば小隊程度なら1人で蹴散らせるほどの力を持つと言つ。

『ええ 確かに私は混合性質を持っています。・・・が。』

一瞬後ろに気配を感じ、振り向くが誰もいない。

『私の性質は火と水・・・。普通ならありえない性質なのですよ。』

ザツ！――！

マハツトさんが右方向に飛び掛け横に一閃した！

「…………だからこそ強い。」

何か霧状のものを切飛ばしたマハットさんの剣は、空を切った。するとマハットさんの背後に男が現れる。

「マハットさん…………！」

男はその瞬間に右手に持つ西洋剣を横に薙いだ

。

第10話（後書き）

良い所で終わっちゃいますね。わざとヘイエイエソソナマサカ

ザンッ！と切り裂く音がした。マハットさんが切り裂かれたと思ったが、切り裂かれたのはマハットさんの大剣を包んでいた白い布だった。

卷之二

マハットさんは一瞬で後ろをとつたウイルナーの後ろをとつた。低い姿勢で大剣を横に振りかぶる、その姿はまるで獲物を捕らえる瞬間の虎のようだった。

舐めてもらひついたや困るな。」

マハシトさんの低い声が聞こえたと思った瞬間。凶悪な一撃がウイルナーの左わき腹を襲つた。

ガイイイイイイイイイン！！

咄嗟に剣で左側面を防護したウイルナーだったが、マハットさんの強烈な一撃を防ぎきれず真横に吹っ飛ぶ。

「グウッ！！」

恐らく大型トラックか何かに轢かれた人間はこのくらい飛ぶのだろう。吹っ飛ばされたウィルナーは剣を地面に突き立てて体を支える。手で左のわき腹を庇っている所を見ると、かなりダメージを負つたようだ。

「・・・・あなた、ただの旅商人ではないんですね。」

「フンッ・・・俺ぐれえの旅商人なんぞ、ゴロゴロいるぜ。あんたが弱いんじゃないのか?」

マハットさんが挑発すると、ウイルナーはフツと笑う。

「いいでしよう。ただの旅商人と思つて油断した私のミスです。こ^レは負けを認めましょう。」

ウイルナーはそういふと再び虚空へと消えた。

「ぐうっ・・・痛う~。」

マハットさんがその場でうずくまる。慌てて駆け寄ると、背中にべつたりと血が着いていた。

「す」「出血だ・・・! 何か止血の出来るもの!」

あたりを見回すと切り裂かれた白い布が目に入る。あの大きさがあればマハットさんの巨躯でも止血できそうだ。

(後は・・・消毒!)

荷台にあるマハットさん秘蔵のウイスキーを取り出し、口に含む

だ後マハットさんの傷口に吹きかける。

「 のあつ！？」

マハットさんは痛そうに顔を歪めるが、化膿を防ぐためなので我慢してもらう。アルコールを吹きかけたあと、白い布で少しきつめに縛る。

「・・・・くう。俺の秘蔵の酒が。」

「我慢してください、まだ半分くらい残つてますから。それに何かあつてからでは遅いですし。」

マハットさんは分かつた分かつたと言つてガハハと笑う。

「ありがとうな。助かっただぜ。」

「・・・・いえ、こちらこそ助けて貰つたんですから。お礼を言つのは俺のほうですよ。」

「ガハハハ！ならお相子だな！」

いつも通り豪快に笑うマハットさんは傷などどうってことは無いといわんばかりに、キャスケット越しに俺の頭をわしゃわしゃと撫でる。俺が強かつたならば、この人に傷を負わせることは無かつたのだろうか。

そう思つと、自然と拳に力が入るのだった。

思わぬ襲撃にあつたため、街道近くの村の邸宿に泊まるとしていた。今回襲撃してきたのはウィルナーだけであったが、また襲われる可能性があるため油断は出来ない。と緊張していたのだが、マハツトさんが

「今回の襲撃は奴一人で終わりだらう。たかが1人に騎士団全体を動かすのは考えにくいしな。なによりこちらの戦力を測りに来たというのもあるだらうし……。暗殺できれば儲けものとでも思つていたのだらうよ。」

と言つていたので多少は気が抜けた。多少だが……。

民宿に着き、料金を先に払つと部屋の鍵を渡される。余り愛想の良い感じではなかつたが、特に嫌なものは感じなかつた。民宿はレベッカさんの店に少し似ていて、2階に宿泊部屋。1階に酒屋という造りになつっていた。ちなみに夕食は別料金である。今の俺には高いのか安いのかは分からぬんだが。

俺は鍵を貰ひうとさつさと部屋へマハツトさんを連れて行き、ベッドへ寝かせる。

「…………じゃあ、マハツトさんと寝ててくださいね。傷口が開きますから。」

「いや、別にわざわざ持つてきて貰わなくても食こに行けるぜ?」

「黙れー寝ててくださいーーそれでわざわざおじさんでござりださーー!」

やういって無理やり寝かして、夕食を取りに行く。

階段を降り、店主にお金を払うと二人前のシチューのようものが出来された。野菜や肉が結構使われていて、ボリュームがありそうだ。

「　　おい、そこの女。」

お盆は渡されなかつたので、気をつけて一つの皿を運ぶ。皿が思ひの他熱くて長時間は持てそうもない。

「　　聞こえてんだろ。白髪子の女!」

階段に差し掛かり、一度皿を置くことにした。熱くて限界だ。階段のすぐ横に出窓があつたのでそこに置く。外を見ると既に日が暮れて、真っ暗になつていた。

「無視すんじゃねえーーー」つち向きやがれえーー!」

「　　!?

肩を無理やりつかまれて振り向かせられる。俺を振り向かせたのは、恐らく同年代くらいの男だった。髪と、少し釣り気味の目は赤茶、身長は俺より少し高い・・・そういうえばこっちに来て俺より身長の低い男に会つてない。この世界の平均身長はかなり高めなのだ

るつか。

「・・・へえ。なかなかかわいい顔してんじゃねえかよ。」

「・・・は?」

「よし、お前のひびきの親方に酌をしやー。」

その青年は、うんうんと満足気に頷くと俺の手をとつて引っ張ろうとする。が、もちろん連れて行かれるつもりは無いので振り払う。

「ていー!」

「なつ
ー?」

振り払うと青年はワナワナと拳を振るわせる。結構頭にきているようだ。だが、俺はマハットさんに食事を持っていかねばならんのでそそくさと皿を持つて階段を上る。

「お、おこ待てー!」
「なつじいな

階段の下から何か聞こえたが、俺は無視して部屋に入るのだった。

第11話（後書き）

いつも、風邪が治りませぬ。更新が遅くなつて申し訳ない。

第1-2話

部屋へ戻ると、マハットさんは大剣の手入れをしていた。目があうとマハットさんは気まずそうに手入れをやめて大剣を鞘に収める。俺はひとつため息を吐くと、一一つあるベッドの間に台を用意してテーブル代わりにする。変な男のせいで少しばかり熱が引いてしまつたが、まだ温かい二つの目を並べる。

「お、ここつあ皿わいじやねえか。」

湯気を立たせる二つの皿を眺めてマハットさんが呟くと、俺も手を合わせる。

「いただきます。」

匙を取り、シチューを口に運ぶとするとマハットさんが不思議そうにこちらを見ている。

「……どうしたんですか？」

「いや、その『いただきます』ってのはなんだ？」

(やうが、異世界じゃこの二つの習慣は無いのか。)

マハットさんに『いただきます』とは、食材や料理人への感謝の言葉だと伝えると向こうも満足と納得していた。

「どうですかこの二つの習慣は無いですか？」

「ああ、大体の国には無いが・・・東方の国々にはそういう『食』や『命』に対する感謝を生活に取り込んでいる国があるらしい。」

東方の国々。たまにマハットさんから聞くワードだ。そういうえばマハットさんから貰つたこの短剣も東方の國のものようだ。

「ねつにえば、ここの短剣も東方の国で買つた物なんですね？」

枕元に置いてある短剣を手に取ると、マハットさんに見せる。

「ああ、いい機会だからここの大陸の極東の国について話そつか。黙つて飯を食うのもどうかと思つじなあ。」

マハットさんはシチューを一口食べると、ふと息を吐く。

「この大陸、『パルティニア大陸』は大まかに言えば菱形になつていて、中央の『ドルグアール帝国』、北方の『ホルクヘツカ皇國』、南方の『バルティニア国』、西方の『レムリニア国』。そして東方の『ジアパニス国』が主に力を持っている。」

ジアパニス国・・・何か響きに聞き覚えがあるような。

「この5つの大国とその他、中小国の幾つかでこの大陸は成り立つているわけだな。」

マハットさんはコホンとわざとじりじりと咳を吐く。

「この大陸の中のひとつ、『ジアパニス国』は『黒き英雄王』に愛された土地と言われていて、なんでも自らの居た世界の文化や技術を持ち込んだとか・・・まあ今となつてはその技術も殆ど伝

わっていながな。』

マハツトさんの言つ失われた技術とは、恐らく俺の世界のものだ
わつ。この短剣が、若干『日本刀』の面影があるのも、その技術の
名残かもしね。

いつの間にかマハツトさんがシチューを食べ終わっている。俺も
冷めてしまった中身を口にかきこんだ。

ガシャーン！－

「・・・んう？」

朝、何かが割れる大きな音で田が覚める。そのままにモドタドタ
と足音のようなものに、罵声。

『『Jの野郎がつー』

『「つるせー殺されてえのか！－』

何やら一階の酒場で騒動が起つてこゑひしご。やのJと云ふ氣づ
くと、マハツトさんも起き上がつた。

「・・・えれえ騒いでんなあ。・・・くふあ～～～。」

セウコウと再びベッド横になる。ビツサヒリ関わる氣はなこらし
い。

(・・・ちょっと見にこつてみつか。)

俺の中の野次馬根性が騒ぐので、昨夜、身体を拭ぐのに使った桶
とタオルを返していくついでに見に行く」とした。

階段を下りていくと、すぐそこには店の店主が困ったように腕
を組んで腰の中心を見ていた。

「何かあつたんですか?」

店主は俺に気づくと、俺の持っていた桶を受け取り困った表情を
する。

「実は昨日、あんたらとは別に団体さんが泊まりに来てね。ビツヤ
らそいつらが性質の悪い奴らだったみたいで・・・。」

「性質の悪い奴ら・・・?」

昨日の赤茶の青年を思い出す。確かに、余り良い連中じゃあな
うだ。

騒ぎの中に田を向けて見ると、そこには昨日の青年がいた。どう
やらその青年と他の男が争っているようだ。

「お前が盗んだんだろ？…さつやと出しゃがれ！…」

「ちげえよー俺は昨日女に声をかけてたんだー何も盗つけやしないねえ
！！！」

青年と男、それに周りの連中も何やらガラが悪そうで全員が全員、
身体のどこかに赤い布を巻いていた。

青年と男は取っ組みになつて喧嘩をしているが、周りの連中は
止めるどころか2人を煽つていて誰一人止めようとする者がいない。
これでは店側にも迷惑が掛かるし、怪我人も出かねないので俺は何
とかして止めようと思い、一歩踏み出した・・・が。

「あー昨日の女だ！…」

赤茶の青年が俺を見つけると、指を指して叫ぶ。

(女って・・・俺のことだったのか！？)

かなり強い衝撃を受け、めまいで倒れそうになつたが何とか踏ん
張る。どうやらこの帽子のせいでの女と間違えられてしまったようだ。

「俺は男だ！…どあほつ…！…！」

そう低い声で叫ぶと、あたりがシーンとなる。その青年はかなり驚いたようで、じつちを見て呆けていた。とんだ間抜け面だ。そのやり取りを見て、さらに周りの連中が青年を離し立てる。お前は男をナンパしていたのかと。

「…………だ、騙しやがったなあ！？」

突然、起き上がったと思うとまた急に逆切れしだした。ワナワナと拳を震わせている。絵に描いたような怒りつぶりだったので少し可笑しかつたが、顔には出ていないだろ？

「勘違いしたのはそつちだらう！…！」

「てめえがオカマみてえな格好してるからだらうがー！」の変態野郎！

「へんた・・・ 誰が変態かあーーーくおりあーーーー！」

俺が怒鳴ると、その赤茶の野郎が「やるかあ！？」と挑発してくれる。周りの連中は喧嘩だ喧嘩だと騒ぎ立てる。俺は必死で、心を落ち着かせる。ここで相手の挑発に乗るのは馬鹿のやることだ。

「やんねーのかよー！オカマちやん！・・・それとも本当についてねえのかあ！？」

さりに赤茶が挑発していく。俺はもう我慢できなかつた。

「うるせえ！……！表え出ろ…………」

人生で初めてこの言葉を使った瞬間だった。

第1-2話（後書き）

そろそろ、そういう感じ出したいですね。

第13話

俺は店の外に出て赤茶と対峙していた。店の外は小さな村のせいか、建物も少なく拓けていた。あたりに余り人影も無く、ここにいるのは俺とこいつらくらいだろう。

「こまさら逃げようなんて思うなよ・・・。」

赤茶がそうこうと、赤い布を巻いた連中が俺と赤茶を囲む。

(や、やめとけばよかつた・・・。)

いまさら後悔するが、こいつなつてしまつては大人しくやり合つしかねないだろう。正直に言つて、俺は喧嘩なんて滅多にしないし殴り合いが好きなわけではない。向こうの世界じゃ喧嘩といつても口喧嘩程度だし、殴り合いなんて今まで1、2度なもんだ。

「安心しろよ！周りの連中は手をださねえから・・・それとも怖気づいちまつたか？」

赤茶がハツハツハと高笑いすると周りの連中も呼応して笑う。

「だ、誰が怖気づくか！さつさと掛かっこいよ！――！」

その言葉を聞いて、赤茶はニヤリと笑うと腰の剣に手をやる。

「死んでから後悔しろー！」

そう言い放つた途端、赤茶が地面を蹴つて飛ぶように俺に駆け寄

る。

(あれ？・・・速いけど。)

俺は不思議な感覚に囚われていた。確かに赤茶は強そうに見えるが、途中で襲われたあの騎士に比べると、威圧感もないし恐怖も感じない。だからと言って俺より弱いわけは無いはずなのだが。

「死ねええええええええ！」

赤茶が抜刀から俺の胴体を真つ一つにしようと、真横に剣を振るう。俺はそれを伏せて避けると、すぐに蹴りで赤茶の足を払った。

「なつ！？」

完全に無意識で身体が動いていた。脳ではなく、脊髄で身体が動いたような感覚。それに集中力が高まっているせいか、相手の動作がスローモーションのようだった。

(よしーー)のまま相手の武器を取り上げればっー)

俺は赤茶の足を払ったあとすばやく相手の武器に手を伸ばす。が。

「チイツーー！なめるなあー！」

赤茶は倒れる瞬間、武器から片手を離すとその手のひらに火球を作り出し、それをこちらへ飛ばした。

俺は武器を諦め、慌てて回避すると赤茶から距離をとる。

「魔法！？」

「へへっ・・・驚いたかよ。俺は元々、炎系の加護を持つていてなあ！」

赤茶はそう言いながら体勢を立て直して再び手のひらに火球を作り出し、俺の方へ飛ばす。

(くつ
！－)

俺はその場から飛びのいて避ける。しかし、赤茶は飛びのくのを予想していたのだろう。こちらに向かつて剣を構え襲い掛かる。

(まずい！
避けられない！－！)

この程度の相手に手こずって貰つてはこまるな。

「え？・・・

がああつ！－！－！？」

「どこからか声が聞こえたかと思いつと、突然世界が暗転する。その瞬間、頭の中がぐちゅぐちゅこれまでのよつた激痛が走った。

(・・・何・・・が・・・・・・・・・・)

俺はそこで意識を失つた。

「あれ・・・・・？」

俺は黒い空間に立っていた。いや、立っているのかどうかも分からぬくらい何も無い空間だった。

「・・・何だ？」
「

ただ只管に広がる黒の世界。不安を覚えるなどいつほづが無理な話だ。

「ど、どこなんだよ……」

不安に心を蹂躪され、語気が強くなる。俺は辺りを見回した。

「ん？」

一点。黒い闇に包まれた世界の中に一粒の光が見えた。俺は手足をばたつかせ、地面があるのかも分からぬ世界で前に進む。その『黄金色の光』に向かって。

「・・・・もう、少しつ――！」

近くまで来ると、光っていたものが見えるかと思ったが今度は光りすぎて見えない。だが俺は、その光の中心にあるものをつかまなければ、この世界から出られないと分かつていた。

「届いて……つた――！」

掴んだ途端、黄金色の光は闇を切り裂き、この黒い世界を覆つて行く。そして光に包まれると俺の身体まで光に包まれていく。薄れて行く意識の中で、俺が最後に見たものは俺の両手に包まれた、闇を切り裂いた色と同じ、『林檎』だった。

「・・・・・え？」

俺は意識の海から戻ると、自分の状況に驚愕した。

周りの人間が全員倒れて呻いていたのだ。

「な、何が・・・・!」

俺は言葉を発そうとしたが、自分の手に持っているものを見て再び驚愕した。

俺が手に持っていたのは、血まみれの剣だった。

(これって、赤茶の奴が持つてた剣じゃないか！？)

「ぐう・・・・て、めえ・・・。」

地面に倒れている赤茶は顔の右半分を手で押さえている。その手

の隙間からは、血があふれ出していた。

「ひつ

」

俺は、今の状況が怖くなつた。これは俺がやつしたことなのか？俺は人を殺したのだろうか？そんな思いに、罪悪感なんて生ぬるいものじやないものが胸に込みあがつてくる。

俺はその場から走つて逃げ出した。

赤鬼の子鬼

「親方あ！移動の準備ができやしたあ！」

俺がこの盗賊団、『赤鬼』に入ったのは今から10年ほど前だろ
うか。俺は生まれつき髪や瞳が赤みがかっていて、多少なり火を操
ることが出来た。うちの村ではたまに出るらしく、『加護の子』と
呼ばれ可愛がられた。

「よし、今夜は食料の調達ついでに酒でも飲みに行くか！」

オオーと周りから歓声が上がる。その中心に居るのが親方のオーリスさん。この人は俺の命の恩人でもあり、戦いや生きて行く術を
教えてくれた師匠でもある。

10年前・・・

俺は、いつも通り家の畠の手伝いをしていた。父がいて、母がいて、妹がいた。これが当たり前だと思っていた。この生活が、この笑顔が。だが、世界と言うものは残酷だ。

魔物の群れだ！

子供を逃がせ！！男衆は武器を持って応戦しろ！

駄目だ！数が多くすぎる！！

火が燃え移つたぞ！…もう駄目だ！逃げろおおお…！

俺は家族と離れ離れになり、数日間森を彷徨つた。魔物に襲われなかつたのは奇跡だらう。魔物から逃げ延びて、村へ帰るともうそこには誰一人居なかつた。魔物に食いちぎられた人だつたものを残して。

絶望に打ちひしがれ、暮らすあても無く街でスリや泥棒なんかをやつて命を繋いでいたときだつたらう。まだ、若かつたオーリスさんと出会つたのは。

それから10年・・・そのころは小さかつた盗賊団は、いまや大陸でも指折りの盗賊団となつた。

だが、大きくなつたからと言つて良いことばかりではない。新しい団員も増え、『派閥』というものが出来始めたのだ。俺は『赤鬼』の中でも指折りの実力を持つが、何せまだ若い。親方に気に入られている俺を妬むものや邪魔に思つものはたくさん居た。

「親方。酒をお持ちしました。」

一団が店について暫く。泊り込みのために諸々の準備を済ますと、俺は親方に地酒を持つていつた。

「おひ、それじゃあ飲むか！」

「はーー! ジャあお注^{アサシ}めすー。」

俺は親方のジョッキに酒をみなみと注ぐ。

「ははは! 女に注いで貰えりや嬉^{ハヤシ}いんだけどな!」

親方は冗談っぽく笑う。確かにうちの盗賊団に女は居ない。親方が言うには、女が居るといよつとしたことで諂いが起ころうだ。正直俺は今まで女というものに余り関わってきていなかった。生きることに精一杯だったし、何より興味が無かった。

飲み始めてまた暫く、俺は用を足しに廁へ行っていた。その帰り道のことだ。

「・・・お?」

その店の店主から夕食を2皿貰つて、白帽子の女が目に入つた。ちらりと横顔が見えたが、可愛らしい感じの女だつた。身長は少し他の女より高めくらいだろうか。

女に興味の無い俺だが、親方が女に酌をしてもらいたいと言つていたのを思い出して声をかける。酔いの勢いもあつただろ?

「　　おい、そこの女。」

声をかけるが、返事も無ければ見向きもしない。聞こえていなかつたのかと、もう一度声をかける。

「　　聞こえてんだろ。白帽子の女!」

かなり近くで言つたので、耳には入つてゐるだらう・・・が。女はまた反応を示さなかつた。

「無視すんじゃねえ!...」しつし向きやがれえ!」

呂律が上手く回らなかつたが、相手の肩をつかんでこっちを向ける。少し痛そうに顔を歪めるが、こっちもイライラしていたので無視をする。

「・・・へえ。なかなかかわいい顔してんじゃねえかよ。」

振り向いた顔は、この辺りの地域の顔立ちではなかつたが俺が見ても可愛らしいものだつた。

「・・・は?」

「よし、お前うちの親方に酌をしる!」

「　　てい!」

俺は女の手を引いて行こうとするが振り払われてしまった。

「なつ

ー？」

女は俺を一度睨むと、そのまま皿を持って階段を上がっていく
しまった。

「お、おいでーー言ひことを聞かねえどどうなつてもしらねえぞー。」

俺が親方のところへ戻ったころには、殆どの奴らが酔いつぶれて
寝てしまっていた。親方は物凄く酒に強いので、殆ど酔っ払ったこ
とはない。今回も酔いつぶれてはいないうだつた。

「おひ、戻つたか。えらく長い便所だつたな。」

親方はジョッキを軽く俺のほうへ上げると、そう言つた。

「いえ・・・まあ。」

曖昧な返事をしておく。女をナンパして失敗したなんて言えば、
酒の肴になつてしまつだらう。親方相手でも癪だつたので、俺の胸
の内にだけどぎめでおいた。

(しかし、あの女・・・次に出来つたら覚えとけよ。)

俺はあの女の鼻を明かしてやると心に決め、店の長いすに横になるのだった。

ない。

「盗つてねえよ。何でもかんでも俺を疑うな阿呆。」

「なつ、なにい！ てめえしりばつくれる氣かーーー。」

ヘンリーと言ひ争ひをしていると、なんだなんだと周りに人だかりが出来る。何だか面倒なことになつたし、何より嫌なやつに絡まれて腹が立つ。

「お前が盗んだんだらうーーーせつむと出しやがれーーー！」

「ちげえよー俺は昨日女に声をかけてたんだー何も盗つちやいねえ
！！！」

つかみ合つていると、皿も割れた。だが周りの奴らは止めに入る
ことはしない。親方が部屋から起きてくれば騒ぎも収まるんだが、
と。階段のほうを見ると、昨日の気に食わない女がこちいらを見てい
た。

「あー！ 昨日の女だーーー！」

最初は、昨日のアリバイを証明してもらおうと思つて声をかけたんだが・・・何故こうなつてしまつたのだろうか。

女が実は男だったということに、俺は何故かショックを受けていた。俺が始めて、好感を持った女が男。字面だけ見ると意味が分からんが、そういうことなんだから仕方が無い。

精神的なダメージも大きかつたせいか、白帽子の男と喧嘩になってしまったのだ。

「安心しろよ！周りの連中は手をださねえから！・・・それとも怖気づいちまつたか？」

「だ、誰が怖気づくか！さつさと掛かってこいや！・・・」

微かに握っている拳が震えているのが分かる。

（まあ・・・ハつ当たりみたいなものだからな。訓練用の剣で脅かせば引き下がるだらう。）

むやみに人の命を奪つことは、親方が禁じているので俺はその命に従う。だが、一応脅し文句と言つものは相手と対峙するときに優位に立つためには必要なので。

「死んでから後悔しろ！」

俺はそういうと、半分ほどの力で技を繰り出した。

(思つたよりやりきがるな・・・。俺に魔法を使わせるとな。)

本気を出せば、建物くらいなら一瞬で消し炭に出来る代物だが、
（）でそれを使うつもりはない。本当に死んでしまつからな。

「へへっ・・・驚いたかよ。俺は元々、炎系の加護を持っていてな
あ！」

俺は小さめの火球を作り出して、白帽子に向かって投げつける。
奴の体重の掛け方を見て、俺は避けるであらう方向に飛び出した。

（よしーこいつで終いだ！）

「ぐつ
があああああーー！」

一瞬相手の表情が苦痛に歪んだ。だが、もう剣は振られているの
で止めることはできない。

ヒュン！――！

だがしかし、肉に当たるはずの剣は空を切った。

「何！？」

しかも、俺の振った剣は俺の手の中から消えていた。慌ててあたりを見回すと、俺の背後に奴が立っていた。俺の剣を片手に・・・。

「探し物はこれか？」

「なっ！？」

突然奴の雰囲気が変わった。奴の殺気が目に見えそうなほど膨らんで、この場にいる連中の心を圧迫する。

「だ、誰だてめえ・・・ほんとにやれつままでのお前と同一人物か？」

俺がそう問いかけると、奴はにやっと口元を歪める。

「フフフ・・・お前たちに教えてやる必要は無い。」

そういうと、奴は剣を地面に突き立てた。するとそのを中心にして魔法陣が拡がる。

「な、何だこりやあ！？」

周りの奴らも既にパニック状態だ。恐らく剣を媒体にして地に干

渉する魔術。

(魔法ではなく、魔術だと！？)

魔術というものは、文字や記号、魔法陣や魔道具を媒体にして行う術式。これは莫大な情報量を書き込めるため、複雑な術や大きな効果をもたらす術に使われる。だが、準備に時間が掛かる上、かなりの知識が必要であり、しかも術式を間違えば事故も起こりかねない。なので実戦は、媒体を必要としない魔法が使われる。

(まあ魔法は誰にでも使えるわけではないし、単純な術式しか使えないでの威力も魔術には劣る。だが、メリットとしては発動が早く、実践向き・・・てな感じか。)

だが目の前にいる奴は、そんな常識さえも打ち破ってしまった。普通、魔法陣と言うものはチョークか何かを使って書くか、あらかじめ用意しておくものだが、こいつは無理やり魔力で陣を描いてしまっている。

(めひやくひやだ・・・・)

俺は、地面から飛び出す、無数の剣に身を打たれながらそんなことを思つのだつた。

赤鬼の子鬼（後書き）

この魔術の説明をすると。

- 1、地面に剣を突き立てる
- 2、そこを中心に魔法陣が拡がる
- 3、突き立てる剣と同じものがいっぱい地面から打ち出される

こんな感じでしょうか。赤茶が使ってたのは訓練用の模造刀見たいな物なんでこいつら死んでません。

何か設定資料みたいなのが載せたほうがいいですかね？

俺は村から暫く離れた森で1人しゃがみこんでいた。攻撃される瞬間からの記憶がストンと抜け落ちている。俺は嫌な予感が拭えなかつた。血まみれの剣に、あの惨状。どう考へてもやつたのは俺自身だった。

(何がどうなつてゐるんだ・・・。俺は一体どうしちまつたんだ?)

衣服には一切返り血がついていない。血が着いていたのは持っていた剣のみ。その剣もあの場に捨ててきた。

使え、貴様のものだ

突然、頭に声が響く、男の低めな特徴的な声だった。

「何を使つて言つんだ! あれは一体なんだ! てめえ俺に何をしやがつた! !」

口が悪くなるのは止めようが無かつた。俺は心のどこかで、こいつが何か取り返しのつかないことをやってしまつたんだと確信して

いた。

なに・・・貴様に^{すべ}術を教えてやつたまでだ

「術だとー? 何のことだー?」

そいつで試して見るといい。気に入るだろ?

「そいつ・・・?」

俺がふと気配を感じて後ろを振り向くと、そこには何か得体の知れないものが立っていた。2メートル半程の身長に、茶色の肌、発達した下あごから伸びる一本の大きな牙。その姿はまるでゲームから出てきた。

「・・・オーク?」

耳を劈く咆哮。そして突進してくる巨大なモンスター。まさに絶体絶命だった。

俺は「わああああー」と奇声を上げながら横に回避を試みた。だが。

オークは俺が飛びのけた瞬間、その長い腕を裏拳の要領でこぢらに振るつた。

ドグアツ！

鈍い音が聞こえ、俺の身体が真後ろへと吹き飛ぶ。

だが、身体に痛みは無かつた。

「・・・これは？」

その時、俺が目にしたのは田の前に出現した魔法陣だった。『身を守ろう』とした瞬間、目の前に金色の魔法陣が浮かび上がり、オーラの腕を弾き飛ばしたのだ。

オークの方を見ると、殴りつけた方の腕があらぬ方向へ向いていた。あれは確実に骨や筋肉がズタぼろになつてゐるだろう。

だが、腕がそんな状態になつていってもオーケは俺から逃げようとしなかつた。それどころかさらに興奮状態に陥つているようだつた。

(大柄な分歩幅もテカくて速い・・・森の中とはいっても、逃げ切れるかどうか・・・)

あの一瞬で見せたオークの反射神経と俊敏性はかなりのものだつた。恐らく走つて逃げてもすぐに追いつかれる。

「クソッ！さっきの魔法陣が思うように出せねば！」

ズキンッ！

「ぐあ ッッ！！」

あの時と同じ頭痛が再び俺を襲った。だが、今度は意識が途切れることも無く・・・

(なんだ・・・・・これは・・・・。)

頭の中に、大量の知識が流れ込んできたのだ。

それはまるで、大きな本を頭の中見て いるような感覚だつた。

(魔法と · · · 魔術の使い方 · · · · ?)

俺が欲しがつた知識が、そこについた。

オークがこちらへと突っ込んでくるが、俺はゆっくりと立ち上がり、右手を前に翳した。

「ちくしょう・・・なるほどなあ。これが・・・魔法つて奴か。」

「ゴンツツツ――――――!

右手を前に翳して、魔法のイメージを作り上げた後に必要な魔力を練り上げる。すると、そのイメージ通り魔法が発動する。術式はシンプルな分、複雑なことはできないが威力は十分すぎるほどだ。

俺が放った魔法は、あの爆裂少女が使ったあの魔法。エクスプロージョン爆発魔法。

ただ、イメージが定まらなかつたのか魔力を練りすぎたのか知らないが、前方50メートルほど森が消失してしまった。

「・・・マジかよ。もう、何でもありだな・・・」

オークは見る影も無く、消失してしまつたらしい。

(これが・・・『知識の林檎』の力・・・)

俺が意識の中の闇の中で手中に入れたものは、行方不明の『黄金の林檎』の知力を司る林檎だと分かった。

恐らく、この世界のありとあらゆる知識が今、この頭の中に入っているのだろう。現代っ子に分かりやすく説明すると、頭にインターネットが丸ごと入っている感じだろうか。

何か疑問に思ったことで、知識の林檎の中に収録されているもの中に答えがあれば、それが導き出される。

つまり、先ほどの俺の「Q・身を守る方法は?」と言つ問いに知識の林檎が可能な限りのアンサーを出す。といった感じだ。

何故こんなことが分かつたのかと聞かれると、これも『知識の林檎』のおかげである。

「ただ・・・使いすぎると大分頭が痛い・・・。」

俺は、知識の林檎から魔法陣の知識を引き出して、地面に木の枝でそれを描くと魔法陣に魔力を練りこんだ。

一瞬で魔法陣を張ることもできるが、あれは知識の林檎の力の副産物なので使うと頭が痛い。できることならこの力を節約したいところだ。

「よし・・・できた。つか、これで本当に転送魔術が使えるのだろうか・・・。うむ、ファンタジー・・・。」

俺は、光る魔法陣の中に立つと起動分の魔力を流してテレポートした。

「あー・・・意味わからんね・・・考えたくねー・・・もーしらん、かつてこじててくれおれはねるぞおやすみ。」

俺は、怪我をさせた連中に自然回復能力を上げる魔術をこっそりとかけてマハットさんの居る部屋に戻った。

今日はまだ昼飯も食べてない俺が、急にふてくされてベッドにねつこんがつたのでマハットさんが変な顔をしていた。

「何か連中と一緒に着あつたらしいじゃねえか。相手連中に死んだ奴はいねえが結構な怪我してたみたいだぜ?・・・おめえさん、そんなに強かったのか?」

「いへへえへへ・・・俺が強いんじや・・・ないんすよへへ・・・なんか・・・・・・おっさん。」

「おっさん・・・?」

俺の記憶はここで途切れた。それにしても、俺が口元したおっさんって一体なんだつたのだろうか。

第1-4話（後書き）

年末にかけて何でこんなに忙しくなるのだろう・・・。店長の残りの髪の毛むしってやりたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3619x/>

魔力と知識の使い方。

2011年11月9日22時50分発行